

プラトン『メノン』における 真なる思わく

吉武 光雄

[キーワード：①プラトン ②『メノン』 ③真なる思わく ④知識 ⑤αἰτία]

序

『メノン』には、真なる思わくは αἰτία の思考によって縛り付けられることで知識となり、また永続的なものとなる、とソクラテスが述べる箇所がある (98a3-6)¹⁾。この αἰτία という語は、原因、根拠、理由、説明などと訳されうるが²⁾、いずれにせよ、そのように訳すだけでは、この箇所での αἰτία の意味は必ずしも明らかにはならない。もちろんここでの αἰτία は、問題となる思わくの真理性が永続するようになるための根拠なのだが、思わくの真理性が永続するようになること、つまり思わくが知識となることの含意を、文脈を追いながら考察することで、より限定を加えた形でこの αἰτία を理解することができるようになるのではないだろうか。本稿では、まずこのことを試みたい。

また、同じ箇所でもソクラテスは、真なる思わくを αἰτία の思考によって縛り付けることは想起だという主張もしている。『メノン』では、先立つ箇所でも、探求することや学ぶことは全体として想起だとする想起説や、それを立証するための奴隷少年による想起の実例が取り上げられているが、それらに加えて αἰτία の思考による真なる思わくの縛り付けとしての想起が語られるのはなぜか。上記の考察を踏まえて、最終的にこ

の問題を検討する。そこでは同時に、知識との関係における真なる思わく
の身分が特定されるはずである。

1. 文脈の確認

1-1 徳の教授可能性についての、知識の性質に基づく議論

初めに、*aitia* の思考による縛り付けということが語られるまでの議論
を概観し、文脈を把握した上で *aitia* の意味を考えることにしたい。

『メノン』後半部において、徳は教えられるものか否かという問題に
ついて、ソクラテスとメノンは次のような手順で考察を進めていく
(87b2ff.)。

まず、教えられるものは例外なく知識だということが同意され、徳が
知識であれば、それは教えられるものだと分かるのだから、徳が知識か
否かということを検討すればよいということになる。

次に、徳が善いものであることが仮設として立てられた上で、検討が
進められていく。ここからの議論は、以下のようにまとめることができ
る。

まず、以下のようにして、徳が有益なものであることが同意される。

- ① 徳は善いものである (87d2-3)。
- ② 全ての善いものは、有益なものである (87e1-2)。
- ③ ①と②から、徳は有益なものである (87e3)。

次に、以下のようにして、魂に属するものも外的なものも、その善悪
は知識に依存することが同意される。

- ④ 節制、正義、勇気などの魂に属するものは、知性を伴う場合に有
益なものとなる (88b7-8)。

- ⑤ 富などの外的なものは、魂が正しい仕方ですれを用い、導く場合に有益なものとなる (88e1-2)。つまり、その有益さは魂に依存する (88e5-6)。
- ⑥ 正しく導くのは知恵のある魂である (88e3)。
- ⑦ ④及び⑤と⑥から、全ての有益なものは知である (89a1-2)。

そして最後に、徳が知識であることが同意される。

- ⑧ ③と⑦から、徳は知である (89a3)。

こうして、徳は知識であり、したがって教えられるものであると、一先ず結論付けられることになる³⁾。なお、ここで扱われた知識は、善いもの、有益なものとしての知識であることに留意しておきたい。

1-2 徳の教師の不在

しかし、次にソクラテスは、徳は教えられるものではないという、正反対の議論を展開してみせる (89d5ff.)。それは次のようなものである。

どんな事柄であれ、もしそれが教えられるものなのであれば、それを教える教師たちと、学ぶ弟子たちが必ずいなければならない。またその対偶をとると、教師も弟子もいないものであれば、それは教えられないものだということになる。

この主張に対するメノンの同意を取り付けたソクラテスは、対話相手をその場に居合わせたアニュトスに変え、テミストクレスやペリクレスといった、誰もが認める立派な人々の子どもが、父親のように優れた徳を身に付けることがなかった事実を指摘する。そして彼らが、自分で徳を子どもに教えられたのであれば、教えなかったはずはないし、自分で教えることができなかったとしても、人脈もあつたし裕福でもあつたのだから、徳の教師がいるのであれば、探し出して子どもの教育を依頼す

ることができたはずだ、とソクラテスは論じる。しかし、繰り返しになるが、彼らの子どもたちは、徳を身に付けることはなかった。ソクラテスによれば、決して子どもたちの素質が悪かったわけではないのにも拘らず、である⁴⁾。

1-3 知識と真なる思わく

ここでメノンは困惑してしまう。するとソクラテスは、一つの解決策を提示してみせる。それは、人間の行為が正しく善く為されるのは、知識が導く場合だけではない、というものである (96c2-4)。

もし人が、ラリサへ行く道を知っていて、他の人々をそこへ導いて行くとすれば、もちろんその人は正しく善く導くことになるが、知らずに、しかしどの道を行けばいいか正しく思いなす場合にも、やはり正しく導くことになる。そこで、「真なる思わくは、行為の正しさに関しては、知に少しも劣らない導き手である」(97b9-10) とされる。

ラリサへの道の喩えの主眼は、判断内容の真理性を有益さの根拠とすることで、行為の正しさと善さが知識以外のものによっても得られる場合があるのを説明することに置かれている。知識だけでなく、真なる思わくも、正しく善く導くもの、有益なものだとソクラテスは考えているわけである。

ただし、真なる思わく、正しい思わくには、知識と決定的に異なる点がある。ソクラテスは次のように語る。

真なる思わくも [ダイダロスの作った彫像と同様に]、留まっている間は価値があり、あらゆる善を成し遂げる。しかし真なる思わくは、長い間留まろうとはせず、人間の魂から逃げ出してしまふ、したがってそれらは大いに価値があるというわけではないのだ、人がそれらを *aitia* の思考によって縛り付けてしまうまではね。そしてこのことは、親愛なるメノン、先程我々によって同意されたように、想起な

のだ。そして縛り付けられると、まずそれらは知識となり、さらに永続的なものとなる。これらのことのゆえに、知識は正しい思わくよりも賞賛されるのであり、そして縛り付けという点で、知識は正しい思わくと異なるのだ。(97e6-98a8)。

このように、等しく善を導く知識と真なる思わくの差異が語られる際に、*aitia* の思考による縛り付けという観点が導入されるのである。

2. *aitia* と善性

2-1 善い行為に永続性を与える *aitia*

以上のことから、*aitia* を単に根拠とするのではなく、さらに限定することを試みたい。

議論の冒頭から問題になっていたのは、徳であり、それは善いもの、そしてまた有益なものだということが同意されていた。そして、この議論中で語られている善さや有益さは、ラリサへの道の喩えの直前で明確に述べられていたように、人間の行為を正しく導くという意味での善さ、有益さであった。ソクラテスが議論を一応その方向に進めているように、徳は真なる思わくだと考えるとして、その真なる思わくを縛り付ける *aitia* は、この意味での善さ、有益さの永続性を保証するものだと捉えられなければならない⁵⁾。

なお、徳は真なる思わくだという線でソクラテスの主張を理解しようとしているのは、対話篇の末尾まで、その主張が対話相手によって論駁されているわけでも、ソクラテス自身によって撤回されているわけでもないからである。議論の中でソクラテスが対話相手に述べていることが、全て本当にソクラテス自身の主張なのかどうかは明確には分からない。少なくとも彼の言葉のうち、一度同意された後ではっきりと撤回されているのは、「徳は知識である」ということのみである。それ以外の

主張については、差し当たりこの議論中では、ソクラテスと対話相手の共通見解として保存されていると看做してよいはずである。ただし、ここで徳が知識ではなく真なる思わくだとされているのは、あくまでその徳が、テミストクレスやペリクレスらが有していたとされるようなものに限定された上での話である⁶⁾。

さて、序でも述べたように、*aitía* の思考による縛り付けということが語られる際の *aitía* は、問題となる思わくの真理性が永続するようになるための根拠である。そしてその思わくは、上で見てきたことから、正しく善く為される行為を導く思わくであることになる。つまり、真なる思わくが *aitía* の思考によって縛り付けられ、知識になるというのは、常に正しく善い行為が導かれるようになるということである。したがって、この縛り付けが、単に真なる思わくを永続的なものにするということを意味しているというように理解するだけでは不十分であり、むしろ、正しく善い行為が導かれるという事態に永続性を与えることを意味していると理解すべきなのである。

2-2 真理性と善性の必然的な繋がり

ただし、正しく善い行為に永続性を与える *aitía* は、あくまで永続性の根拠なのであって、正しさ、善さの根拠であるわけではない。このことは、「真なる思わくは、行為の正しさに関しては、知に少しも劣らない導き手である」(97b9-10) と語られていたことを鑑みれば、容易に理解できよう。*aitía* による縛り付けを欠いた思わくでも、それが真なるものでありさえすれば、正しい行為を導くという点では知識と同じ価値を持つ。つまり、正しさや善さは、*aitía* による縛り付けにではなく、思わくなり知識なりの真理性に依存しているのである。ここには、認識が真であればそれが導く行為は善であるという、真理性と善性の必然的な関係性が見られる。この箇所では、「思わく *δόξα*」にかかる形容詞として、「真なる *ἀληθής*」と「正しい *ὀρθός*」の二つが併用されているの

も⁷⁾、このことの表れだろう。

なお、先に1-1で、あらゆる善性、有益性が知識に依存するという議論を追ったが、そこで知識とされていたものについて、今の観点から確認し直すこともできる。そこで語られていた知識、善性が依存するものの本質は、真理性だったのである⁸⁾。

3. *aitría* の思考による縛り付けと想起

少し話は変わるが、ここからは、1-3末尾の引用箇所中で、*aitría* の思考による縛り付けについて、「そしてこのことは、親愛なるメノン、先程我々によって同意されたように、想起なのだ」(98a4-5) とソクラテスが語っていることについて見ていきたい。

『メノン』では、これまで扱ってきた議論以前に、探求は不可能であるとする、所謂探求のパラドクスがメノンによって提示され、それに対してソクラテスが、探求することや学ぶことは全体として想起だという想起説を提出し、探求の可能性を確保しようとする議論が行われていた。そしてその後、ソクラテスは、実際に想起、すなわち探求が行われることを示すために、メノンの奴隷の少年に、その子が生まれてから一度も取り組んだことのない幾何学の問題を、メノンの前で解かせてみせた(80d5-85b7)。

非常に大雑把ではあるが、こういった経緯を踏まえて、*aitría* の思考による縛り付けが想起だとされていることについて考察してみることにする。

まず、*aitría* の思考による縛り付けが想起と同定される際に、「先程我々によって同意された」と述べられているが、「先程 *ἐν τοῖς πρόσθεν*」という言葉が示す箇所は、必ずしも明らかではない。

トンプソンは、この「先程」は、『メノン』で初めて想起説が導入されている、次の箇所以下を示しているとする⁹⁾。

魂は不死なるものであり、既に幾度も生まれ変わってきたものであって、この世のものもハデスの国のものも、全てのものを見てきているのであるから、魂が既に学んでしまっていないものは何もない。そこで徳についてもその他の事柄についても、以前に知っていたものである以上、魂がそれらのものを想起することができるのは何も不思議なことではない。というのも事物の本性は、全て互いに親近な繋がりを持っていて、しかも魂は全てのものを既に学んでしまっているため、もし人が勇気を持ち、探求に倦むことがなければ、一つのことを想起すると——このことを人間たちは学ぶと呼んでいるのだが——その想起がきっかけとなって、自ら他の全てのことを発見することを妨げるものは何もない。というのも探求することや学ぶことは、実は全体として想起なのだから (81c5-d5)。

これに対してブラックは、この「先程」は、幾何学の問題に取り組んだ奴隷少年が正答に至った直後に、ソクラテスがメノンに語る言葉、すなわち以下の箇所を明らかに示しているとする¹⁰⁾。

そして今この子にとってこれらの思わくは、ちょうど夢のように、たった今日覚めさせられたのだが、しかしもし誰かがこの子にこれらの同じ事柄を何度もいろいろな仕方で尋ねれば、この子は最終的に、これらのことについて誰にも劣らずに正確に知るだろうということを、君は分かっている (85c9-d1)。

トンプソンの理解では、上の引用箇所以下という指示の仕方が漠然としすぎていて、*αἰτία* の思考による縛り付けが何と対応することになるのか不明である。他方、ブラックの理解を採れば、「何度もいろいろな仕方で尋ねることの結果」と *αἰτία* の思考による縛り付けが対応していると考えることができる。そこで、ブラックのように理解するのがよい

だろう¹¹⁾。縛り付けは、様々な仕方で繰り返される探求の過程を意味するのである¹²⁾。

また、*aitía* の属格を用いた「*aitía* の思考」という表現は、それだけでは、*aitía* への思考を示しているのか、*aitía* からの思考を示しているのかははっきりしない¹³⁾。ここで、縛り付けは探求の過程を指すという今の理解に基づいて考えてみると、*aitía* の思考は、前者、すなわち *aitía* へ向けての思考だということになる。他方で、*aitía* からの思考とする場合には、既に把握した *aitía* を始点として理解の道筋を組み立てていく作業が想像されることになろうが、そうではなく、ソクラテスが *aitía* の思考という表現を用いる際に念頭においているのは、正しく善い行為を永続的に導くための、未だ知られていない *aitía* に少しでも近付こうとする探求者の姿だということになる。

ソクラテスは、想起の実例としての、幾何学の問題についての奴隷少年との対話を終え、想起である探求があることを立証した後で、次のように述べる。

僕は他のいろいろな点に関しては、この説 [= 想起説] について、それほど確信をもって断言しようとは思わない。ただしかし、人が何かを知らない場合に、それを探求しなければならないと思う方が、知らないものは発見することもできなければ、探求すべきでもないと思うよりも、我々はより優れた者になり、より勇気づけられて、怠惰な心が少なくなるだろうということ、この点についてはもし僕にできるなら、言葉の上でも実際の上でも、大いに強く主張したい (86b6-c2)。

ここでソクラテスが語っているのは、探求をせずに無知に甘んじるのではなく、一度無知を自覚したなら、探求の難しさに怯むことなく、それに向かって行くべきだということだと、まずは理解されるだろう。そ

して2で見たことと、*aitia* の思考による真なる思わくの縛り付けが想起、探求であることを併せて考えるならば、ソクラテスにとっては、その縛り付けの作業を行うことで知識を得ようと努めることは、常に正しく善い行為をすることができるようにしようとすること、少なくともその状態にできる限り近づく努力をすることを意味していることになる。これをソクラテスが強く主張し求めるのは、当然のことだと言わねばならない。

4. 真なる思わくの価値

ここで、上の2と3での考察をそれぞれ確認し、そこから『メノン』において真なる思わくがどのように評価されていることになるのかを検討してみたい。

まず、2を振り返ると、*aitia* の思考による真なる思わくの縛り付けとは、思わくの真理性に永続性を与えることだった。そして、知識と真なる思わくは、有益さの点では何ら変わる所がなく、両者の相違は、永続性の有無という一点に係っていた。また、3では、*aitia* の思考による真なる思わくの縛り付けは想起と呼ばれており、『メノン』前半部で導入されている想起説、とりわけ奴隷少年による想起の過程と対応する形で語られていることを見た。では、探求、学び、想起という営みにおける真なる思わくは、どのように評価されるべきものなのだろうか。

先にも引用したが、奴隷少年による想起の実例の箇所の末尾で、ソクラテスは真なる思わくについて、

これらの思わくは、ちょうど夢のように、たった今日覚めさせられたのだが、しかしもし誰かがこの子にこれらの同じ事柄を何度もいろいろな仕方で尋ねれば、この子は最終的に、これらのことについて誰にも劣らずに正確に知るだろうということを、君は分かっている

(85c9-d1)。

と述べている。この語り方では、真なる思わくと知識の関係はやや曖昧であり、真なる思わくが次第に知識へと変容していくのか、両者は別物であって、知識は真なる思わくを押し退ける形で成立するのか、あるいはさらに別の関係をソクラテスが念頭に置いているのか、明確には分からない。

他方、*aitia* の思考による真なる思わくの縛り付けとしての想起が述べられている箇所では、縛り付けの結果が知識であり、そこにおいて真なる思わくは縛り付けられているのだから、知識が生じた際に真なる思わくがそれ以外のものになったり、消滅したりするのではないこと、真なる思わくは知識の中で保存されることが明らかである。ここから、ソクラテスが真なる思わくを、最終的に捨て去るべき何ものかではなく、知識を構成する要素と看做していることが分かる¹⁴⁾。

そして、3での考察のように、*aitia* の思考による真なる思わくの縛り付けとしての想起と奴隷少年による想起が対応するのであれば、奴隷少年による想起に際して語られる真なる思わくの場合も、このことは当然同じでなければならない。

2-2で見た通り、真理であることこそが善であることを支える。*aitia* の思考によって縛り付けられれば行為の永続的な善さの根拠となることができる真なる思わくは、偶然的な有益さ、善さを生むものとして知識と並置させられているだけでなく、知識が知識である以上必ず持つ善性を保証するものとしての価値を与えられているのである。

結

上でも触れたが、真なる思わくについてこのような価値付けがされていることは、『メノン』前半部の想起説及び奴隷少年による想起の箇所

からは読み取りにくい。したがって、それとは形を変え、*αἰτία* の思考による真なる思わくの縛り付けという仕方でも再度想起が語られる理由、少なくともその理由の一部は、真なる思わくのあり方やそれに対する評価を明確にするためだと考えられる。この意味で、*αἰτία* の思考による真なる思わくの縛り付けとしての想起について語られていることは、想起説及び奴隷少年による想起について語られていることを補足していると言える。

なお、『メノン』前半部でこのことが表立っては語られず、後になってから語られることになっているのは、それぞれの箇所でも想起という構造に言及しながらソクラテスが展開する議論の目的が異なっていることに起因しているのではないかと私は考えている。しかし、このことについては稿を改めて論じたい。

また、知識は真なる思わくが *αἰτία* の思考によって縛り付けられることで生じるものだとした所で、その内実は未だ不明なままである。例えば、*αἰτία* とは何であり、それがどのようにして真理性を永続させるのかということについても本稿では論じることができなかった。こういった問題の考察も今後の課題である。

注

- 1) テキストとして、J. Burnet (ed.), *Platonis Opera*, vol. 3, Oxford Classical Texts, Oxford: Oxford UP, 1903 を使用した。引用の際に示したステファヌス版の頁数、段落記号、行数も同書に拠っている。
- 2) Sharples, p. 184.
- 3) 本文中で「知識」、「知性」、「知」としたのは、それぞれ *ἐπιστήμη*, *νοῦς*, *φρόνησις* である。『メノン』においては、これらの語はほぼ同じ意味で用いられているとみてよいように思われる (Bluck, p.331, Sharples, p. 164)。なおクラインは、*ἐπιστήμη* と *φρόνησις* について、両者は関連した語であるとした上で、相違を説明している (Klein, p. 215)。
- 4) Bluck, pp. 371f.
- 5) クラインは、*αἰτία* の思考による縛り付けというのは、独力での思考によ

り真なる思わくの根拠を見つけることであり、また、ここでソクラテスが語っているのは、主に、人間の立派な行為を決定するものについてであるとされている (Klein, pp. 247f.)。

- 6) 対話の中で同意された事柄は、その議論の範囲内では、当事者同士に共通の了解事項となっていると考えるべきだろう。もちろん、ソクラテスが対話相手に合わせて、本心とは異なる議論を展開している可能性はある。対話篇末尾では、それまでの議論が正当なものではなかった可能性が示唆され、徳とは何であるかという保留された根本的な問題を先に吟味することの重要性が指摘されている (99e4-100b6)。メノンの考える徳が実際には徳の影のようなもの (cf. 100a6-7) であることを示すのが、ソクラテスが真なる思わくとしての徳を議論に導入する目的の一つなのかもしれない。なお、徳は知識であるか否かという論点は『プロタゴラス』にも見られるが、結論は曖昧にされている。
- 7) 例えば、97b9 の δόξα ἀληθής と 97c4 の ὀρθή δόξα など。
- 8) 『メノン』における αἰτία の思考による真なる思わくの縛り付けを対象とした研究はいくつかあるものの、それらのうち、ここで語られる思わくの真理性が善性と結びついていることに注目しているものはほとんどない。例えば Nehamas や Wilkes は、この箇所も扱いつつ知識が獲得される構造やその妥当性についての検討をしているが、思わくの本質性と善性の関係については全く顧慮していない。
- 9) Thompson, p. 221.
- 10) Bluck, p. 414.
- 11) この点について、バーニェットもブラックと同じように理解している (Burnyeat, p. 182)。
- 12) 想起するということが、ある時点での瞬簡的な出来事ではなく、探求の過程全体を意味するということは、ブラックも指摘している (Bluck, p. 288)。
- 13) 属格の様々な用法のうち、この箇所では目的の属格が用いられていると文脈上考えてよいだろう。問題は、その目的の属格で表されているのがどのような事態なのかということである。
- 14) このように述べているのは、知識の構造とそれにおける真なる思わくだったものの役割を明確にすることが本稿の目的だからである。当然のことながら、ソクラテスは知識と真なる思わくを峻別している (98b2-5)。何らかの知識が獲得された場合、かつて真なる思わくであったものはその中に保存されているが、それは知識ではないただの真なる思わくとは決定的に異なっている。知識は永続性を持つものであり、思わくは永続性を持たない偶然的なものなのだから、縛り付けられた真なる思わく、すなわち永続的な真なる思わくというのは、形容矛盾なのであって、実際にプラトンは

そのような書き方を決してしていない。縛り付けられているものは、あくまで知識なのである (98a7-8)。しかし、それでもプラトンが、他の何かではなく、真なる思わくが縛り付けられると、それは知識になるとソクラテスに語らせているということこそが、彼の真なる思わくに対する評価を浮き彫りにしていると考えられるのである。

参考文献

- Bluck, R. S., *Plato's Meno*, Cambridge: Cambridge UP, 1961.
- Burnyeat, M. F., "Socrates and the Jury: Paradoxes in Plato's Distinction between Knowledge and True Belief," *The Aristotelian Society*, Supplementary volume, no. 54, 1980, pp. 173-191.
- Day, J. M. (ed.), *Plato's Meno in Focus*, London: Routledge, 1994.
- Fine, G., "Inquiry in the Meno," *The Cambridge Companion to Plato*, Kraut, R. (ed.), New York: Cambridge UP, 1992, pp. 200-226.
- Irwin, T., *Plato's Moral Theory*, New York: Oxford UP, 1977.
- , *Plato's Ethics*, New York: Oxford UP, 1995.
- Klein, J. A., *Commentary on Plato's Meno*, Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1965.
- Matthews, G. B. and T. A. Blackson, "Causes in the *Phaedo*," *Plato Critical Assessments*, vol. 2, Smith, N. D. (ed.), London: Routledge, 1998, pp. 45-53 (Originally published in *Synthese*, no. 79, 1989, pp. 581-591).
- Nehamas, A., "Meno's paradox and Socrates as a teacher," in Day, pp. 221-248 (Originally published in *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, no. 3, 1985, pp. 1-30).
- Scott, D., *Recollection and Experience*, Cambridge: Cambridge UP, 1995.
- Sharples, R. W., *Plato: Meno*, rev. ed., Oxford: Aris & Phillips, 1991.
- Thompson, E. S., *The Meno of Plato*, London: Macmillan and Co., 1901.
- Vlastos, G., "Anamnesis in the Meno," in Day, pp. 88-111 (Originally published in *Dialogue*, no. 4, 1965, pp. 143-167).
- , *Platonic Studies*, 2nd ed., Princeton: Princeton UP, 1981.
- Weiss, R., *Virtue in the Cave*, Oxford: Oxford UP, 2001.
- White, N. P., "Inquiry," in Day, pp. 152-171 (Originally published in *Review of Metaphysics*, no. 28, 1974-1975, pp. 289-310).
- Wilkes, K. V., "Conclusions in the Meno," in Day, pp. 208-220 (Originally published in *Archiv für Geschichte der Philosophie*, no. 61, 1979, pp. 143-53).

True Belief in Plato's *Meno*

YOSHITAKE, Mitsuo

In Plato's *Meno*, Socrates says that after true beliefs have been tied down by the reasoning of the cause, αἰτία, they become knowledge in the first place, and then remain in place. He calls this tying down a recollection. Earlier in the dialogue he explains the recollection in a different way, so the question arises as to why he offers an additional account in terms of tying down true beliefs.

Socrates states that the virtue is true belief, and true beliefs are something beneficial and accidental. Then he speaks of that tying down.

On the one hand, the virtue is something good, and this quality depends on the veridicality of the belief. On the other hand, tying down by a reasoning of αἰτία makes that veridicality lasting. Then, it means making something good permanent to tie down true belief by the reasoning of αἰτία.

We can understand that true belief not only has accidental veridicality, but it also can support knowledge. From that point of view, knowledge does not exclude true belief. Socrates explains the recollection as tying down to emphasize this point, and sees the value of true belief more than only having accidental veridicality.

(人文科学研究科哲学専攻 博士後期課程 3年)